



神事



兎巾準備



水行者当番宿へあいさつ



先祓い



長野県無形民俗文化財

草越「寒の水」

寒の水は、一年で最も寒いと言われる大寒の時期である1月20日に毎年、当番宿で神主、氏子総代が中心になり行われています。当番宿は年番宿とも言われ、順番は、家を新築した順に申し込み決まります。

まず当番宿に神主、氏子総代、関係者が集まり役割を決め準備を始めます。準備は祭壇の用意、祠のしめ縄張り、兎巾作りなどを分担して行います。その後、当番宿に集合し、神事が行われます。

当番宿での神事が終わると、先祓いが行われる。これは白い上衣をまとった関係者が金剛鈴、錫杖を持ち、法螺貝を吹き、太鼓を鳴らして「桶出したり、水出したり、浴びて通るは寒の水」と言いながら、区内を一巡し、道を清め、行事の開始を告げます。

先祓いが周りを始めてから水行者が集まり始めます。まず当番宿であいさつをし、公民

館に向かいます。行者には粕汁と御神酒が振舞われ体を温め、ふんどし一丁の裸姿で、頭に兎巾をかぶり、わらじを履き身支度を整えます。

準備が整うと士気を高め、午後6時一斉に出発します。外に飛び出た68人の行者は、区内6ヶ所に用意された桶から、水を汲み出して体に浴びせかけ、凍てつく道を走ります。途中、区の北側にある熊野神社に兎巾を奉納し、帰日も水をかぶりながら公民館に戻ります。

公民館に戻ると庭先にわら火が用意されていて体を暖めます。その時、行者はやつと笑顔になり体からは蒸気が上がり、観客に寒さを伝えます。よく体を暖めた後に、足を暖めるお湯が用意されていて、足を入れる行者は冷えているからか「痛い」と一声。

公民館に上がり衣服を着て御神酒と温かい汁で体を暖めている行者の中からは、「来年はもうやらない」との声が。

「でも、結局はこの場所に

いるのかな」と最後に一言。草越区の関係者からは「寒の水が有名になり参加者、観客は増えている。しかし、寒の水はあくまでも神事であり、騒いで楽しむものではない。その事を伝え、また次の世代に引き継いでいくことに難しさを感じている」とのことでした。私たち観客は豪快に水をかぶっている姿を見てカメラを向けていますが、行われている行事の意義についても考える必要があると感じました。

修験の寒行を受け継ぎ、集落の五穀豊穡、無病息災を祈るとともに、当番宿の繁栄を祈願する勇壮な行事です。





道祖神にお祈り



ハートピアみよたで交流



神事



子どもの安全を守る

小田井道祖神祭り

道祖神祭りは古くより各家庭でわら馬を作り、そのわら馬を引いて道祖神にお参りをしていた風習です。これを、昭和46年に復活させ、小田井道祖神祭りとして、区でまとまって、1月末から2月初めの休日に毎年行われています。当時の記録を見せてもらいました。そこには、「近代社会に於ては古くから伝はる村の素朴な行事が年々衰微して影をひそめその反面クリスマス等の行事が盛んになりたるとはなんとたる事だろうか。一方交通機関(特に自動車)の発達いちじるしくそれに伴い交通事故の発生は日に日に増加し交通戦争の名称すら生れる世相なり。此の時代に古風な村の風物詩的な行事を子供と共に楽しむことも又意義あるものであらん(一部抜粋)」とありました。子どもの事を大切に思い、地域のつながりを大事に考えているのが伝わります。

現在の道祖神祭り保存会会長である尾台正樹さんも、「地域の行事を保存し、受継いでいくのはもちろんだが、子どもたちを大切にし、行事を通して地域の交流を深めていきたい」と話していました。当時の思いが伝わっているのでしょうか、自分の子どもが小学校を卒業した後も、祭りに参加している方が大勢いました。

祭りは、「今日は道祖神のお祭りだ。皆んな仲よくお祭りだ。交通事故のないように、無病息災すこやかに、皆んなでお参りいたしましょう」と、子どもたちが元気よく掛け声をかけ、大きなわら馬を引き区内を練り歩いて、各家にお札とおはぎを届けます。途中で道祖神にお祈りし、最後は神社で神主さんと神事を行います。わら馬は、神社の境内で来年の出番を待ちます。おはぎに使われるお米は保存会の方が協力して作っています。

今回、町で行われている2つの行事について取り上げましたが、町内では他にもさまざまな行事が行われていて、地域の交流の場となつています。参加する子どもたちが少なくなるなど、ここでも少子化問題の影響も出ていますが、地域のつながりが持っている場所として、また古くから伝わる行事を受継ぐ場として、残していったほしいものです。